

尾崎酒造(新宮市)

尾崎 征朗社長 61

頑張ってます

トップインタビュー

6代目だそうですね

昭和21(1946)年の大火で酒蔵が焼けたため、詳しい書類は残っていませんが、明治の初めごろから続くようです。場所も移動したことはありませんが、新宮市のままで、ずっと尾崎家がかかわってきました。昔は新宮市周辺にもほかに酒造会社がありました。今はうちだけになりましたね。

本州最南端の酒造会社と

地酒造りは温度管理が重要で、設備のない時代は寒い地方の方がいいと言われました。確かに新宮は温暖な地ですが、うちはすぐ北側に熊野川が流れ、冬は夜中に北から冷たい風が酒蔵に吹き込むんです。熊野川の伏流水は良質で、条件に恵まれていると思います。代表的な銘



2006.1.17
読売新聞より

「熊野の酒」と呼ばれたい

柄「太平洋」は、芳純で濃厚な口当たりが特長。地元出身の文豪・佐藤春夫氏や作家・中上健次氏にも愛してもらいまし

た。
——最近ほかの様々な名前も目にしますが
「熊野三山」「方土徐福」「速玉」など、20ほどあるでしょうか。「太平洋」は戦後、唯一の銘柄でしたが、1970年代から増やしていきました。近隣の商工会などから、その土地らしい名前を付けた酒を造ってほし

い、との要望も多いんです。和歌山の酒は一般的に「紀州の酒」と呼ばれますが、「熊野の酒」と呼ばれるように、この強いこだわりがあります。
——こだわりといえば、数年前から地元の杜氏にしたとか
長年、但馬から杜氏と蔵人が来てくれていました。地酒としてのイメージを強める

ため、熊野の人間だけで酒を造りたい、という思いがありました。但馬にも若い人が少なくなっていたということもあり、それではと、地元の間を蔵人に入れ、技術や知識を身につけさせました。今では杜氏、蔵人ともに地元の人間が担っています。
——今後の展望は？

熊野には霊気があるとされますが、酒にもそうした霊気をいただいていると思っています。世界遺産となり、多くの人の目に触れるチャンスをもたらすと、熊野という土地には感謝もしています。古いものを守りつつ新しいものに挑戦し、「熊野に行けば尾崎酒造がある」と全国の人に思ってもらえるようになれば。また、地域のみなさんにかわいがってもらい、少しでも活性化の一翼を担えれば、と考えています。

新宮市生まれ。東京農大で醸造の知識などを学んだ後、愛知県岡崎市の酒造メーカーで3年間勤務、尾崎酒造へ。

約10年前から社長。現在、新宮商工会議所副会頭も務める。清酒以外にリキュールや焼酎も製造、発売する。